

薬用植物園かわらばん

いま、こんな草木も楽しめますよ！
草木に囲まれ心も体もリフレッシュ…



2021年
6月11日
第116号



シュロ（ヤシ科）

管理棟横の垣根沿いに2本、薬草園南側の公園との境界フェンス沿いに2本、その他にもあります。背が高く成長し、葉先が垂れているのをワジュロ、樹高が低く、葉面が小さく葉先が垂れないのをトウジュロと呼びますが、品種の違いで、種は同じとされています。平安時代に中国から伝来した雌雄異株の外来種の常緑樹で、お寺木、公園樹としてよく見られ、江戸時代には、すでに庭園に植えられていたようです。初夏に大きな花序を出し黄色の花を多数咲かせます（写真は5月中旬に撮影したもの）。シュロの葉は、棕櫚葉

（シュロヨウ）という生薬となり、収斂、止血を目的に使用されます。また、葉柄の基部からシュロ皮が得られ、その繊維が縄、たわし、ほうきの原料として使用されます。お寺にある鐘を突くための棒の原料にもシュロの幹が使われています。

ハンゲショウ（ドクダミ科）

ひょうたん池の横で早くも半分以上白くなった葉と下垂した尾状の花を見つけました。本州から沖縄、朝鮮、フィリピン、中国の水辺に広く分布する多年草です。名前の由来として、天球上の黄経100度の点を太陽が通過する日、7月2日頃の暦日を「半夏生（はんげしょうず）」と呼び、この時期に白い花を咲かすから、という説と、葉の一部が白く変化する様子を半分、化粧したから、という説とがあります。葉の緑と白の対比が美しいので主に鑑賞用とされています。地上部が、三白草（サンパクソウ）とという生薬となり、利尿、消腫、清熱解毒を目的に、小便不利、むくみ等に用います。また、できもの、はれ物には生の葉に食塩を加え、つき砕いたものを外用します。